

大阪国際がんセンターの次はいよいよ

関西BNCT医療センター

毎 日 新 聞

2017年(平成29年)3月5日(日)

な に わ の 隅 で 小 休 止



一般社団法人関西BNCT医療センター長を務める大阪大の黒岩敏彦教授(脳神経外科)

000平方メートル。大阪医大だけでなく、他の大学や病院、機関が共同で利用し研究を進める。

「関西でのBNCTセンター構想は、できるべくしてできた」。そう話すのは、一般社団法人関西BNCT医療センター長に就任した黒岩敏彦・大阪医大教授(脳神経外科)だ。

BNCTとは間核分裂させてアルファ線を発生させ、がん細胞を破壊する。アルファ線が飛ぶ距離はがん細胞1個分ほどの長さ。このため正常細胞にほとんど損傷を与えず、がんだけを選択的に攻撃できるという。京都大原子炉実験所カーと京都大のチーム。良量のホウ素製剤を作ったのも日本の研究者と黒岩さん。そして京大や大阪大、大阪府立大などが研究を引っ張ってきた。だから「関西にできるべくしてできた」といわれる。ただ、がん細胞が死なないと、警戒するべきではない。検査法や治療法が進み、今や早期発見・治療すれば「治せる病気」だ。

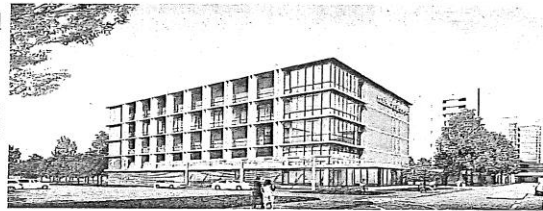
がん新治療拠点大阪に

日本人の2人に1人がかかり、3人に1人が死亡するといわれる「がん」。警戒するべきではない。検査法や治療法が進み、今や早期発見・治療すれば「治せる病気」だ。

ただやっかいなのは、がん細胞が変異した自分の細胞であること。がんを攻撃して治療しようとする、正常な細胞もダメージを受けてしまう。

がんの新しい治療の研究拠点を、大阪医大(高槻市の敷地内)で「関西BNCT医療センター(仮称)」の建設が進ん

BNCT(ホウ素中性子捕捉療法)



関西BNCT医療センター(仮称)の完成予想図。関西BNCT医療センター構

たると核分裂を起こすホウ素をがん細胞に取り込ませておく。そして外部から低いエネルギーの中(熊取町)でも臨床研究が行われ、大阪医大もかわってきた。

がん治療には、手術▽放射線療法▽化学療法―の主に三つがある。通常の放射線療法では、線量限度いっぱいまで照射すると再発した場合に追加照射できないが、BNCTなら再発したがんでも治療可能。放射線療法に加わる「次世代の治療法」として期待されると

黒岩さんは「BNCTは発展途上。ホウ素製剤の改良が進めば、さらに効果が高まる」と大阪・高槻から、新治療の情報発信されているのを期待する。診療開始は2019年の予定だ。

建設中の施設は地上3階、地下1階で延べ約4

【関野正】